

ふくらく通信

2013年 第6号 12月18日発行
 総号数 66 発行人 菅野香織

↓ 保存へと動き出した、山元町の
 旧中浜小学校
 (2012年6月撮影)
 保存のための調査費を配分すると、
 先月、復興庁が発表した。

それでも生きていくために
 ～震災遺構を思う～

何度も思い巡らし、涙し、わが身におきかえ考えた。
 同じにはなれないけれど、人の痛みは分かる。
 そして、いつも行きつく、この答え。

向きあい、震災遺構を生きる糧に。
 災禍の悲劇をくり返さぬ努力が、乗り越える道。

あの日も、なかつたことには出来ない。

痛みは 追いかけてくる。

どうしたらいい。

怖さや辛さを、誰かのために役立てるへ変えられたらと思う。
 失った人も、引き継ぐ者も、報われる生き方を見つけれたらと思う。

寄り添う人も、お話を必要とする人も、きっといるから。



横倒しになった旧女川交番
 女川にある3つの震災遺構のうち
 2つは解体が決まったが、この交番は保
 存を検討するとされた。

保存検討で残る旧女川交番
 ～解体と保存の狭間で～

人々、は、きつと思っただろう。
 怖さや悲愴さだけではない。
 どうしたら命を守れるか。
 どうやって苦境を乗り越えるか。
 自分にできることは何か。

山元町の中浜小学校では、震災
 当時、日頃の準備どおり高台に避
 難したが、高台まで間にあいな
 い児童は屋上に避難させたとい
 う。校舎は濁流に囲まれたが、屋上
 避難した人々は助かった。
 このように、命を守った建物は、遺
 構として受け入れやす、かもしれ
 ない。しかし、震災遺構のほとんどが、
 犠牲者を悼む場である。
 それでも、受け継がれることが必要
 な気がする。
 遺構には、心に訴えかける大きな力
 があるから。

津波も目の当りにした人々の心は、
 追いかけてくる痛みを耐えるのが精
 一杯で、気持ちを切り替えるのは難し
 いはずだ。
 それでも、大切な命を守る努力を
 することで、乗り越えようと動き出
 す人々がいる。



← 東側から西を見て
 中央のが女川交番
 (一部が欠けた建物)
 後の高台に病院、左奥に解体
 決定の江島会館が見える。

↓ 病院側の見た交番
 引上げられたように倒れ、
 津波の凄まじさが
 察せられる。

動ける人から、進むしかない。
 人は様々だ、時間がかかる人、後から
 しか動けない人もいる。
 それを包み込めながら、他所の人とも
 関わって、共に前へ進んでいくことが、
 大切ではなからうか。
 遺構保存も復興も、周囲の手助
 けが必要なことと思う。
 震災遺構は、消してしまつたら取
 り返しがつかない。
 費用をかけてでも、保留にするのは、
 無駄ではなく、立ち直るために通る、
 必要な過程ではなからうか。

